

境界／生と死の風景をあるく

かつて境界とは眼に見え、手で触れることのできる、疑う余地のない自明なものと信じられていた。しかし、わたしたちの時代には、もはやあらゆる境界の自明性が失われたようにみえる。境界が溶けてゆく時代、わたしたちの生の現場をそう名付けてもよい。

たとえば、生／死を分かち境界。ほんの十年か二十年足らず昔には、死の訪れはだれの眼にもあきらかな劇的な瞬間であった。今は違う。病院の白い小部屋に横たわる肉身の死を、わたしたちはもはや、心臓に端子を結んだ機械の画像のなかの波が少しづつうねりを弱めつつ、一本の線と化す瞬間としてしか体験できない。死は機械が告知するもので、わたしたちが自身の眼で確認できる性質のものではなくなった。脳の死・心臓の停止・肉体の腐敗……、生／死を隔てる境界はどこにあるのか。

あるいは、男／女・大人／子供・夜／昼そして想像／現実……を分かち境界、いや、おそらくは境界という境界のすべてがいま曖昧に溶け去ろうとしている。異界ないし他界という、超越的な彼岸がわたしたちの日常の地平から根絶やしに逐われたとき、いっさいの境界が自明のものとして存在しつづけるための根拠もまた、潰えてしまったのかもしれない。異界＝他界という、差異の絶対的な指標の失われた場所では、境界はたえざる浮遊状態のなかに宙吊りされている。

死後の世界がたしかな実在として存在したとき、生／死はくっきり分節化されていた。現世／他界を往還することが可能であると信じられた古代、生／死を分かち繋げる境界は、黄泉比良坂（よもつひらさか）とよばれた。坂が現世／他界を、生／死を仕切る境界であった。この坂（＝さかい）の向こう側に、死者たちの世界＝黄泉の国がひろがっていた。ひとたび死んだ者が息を吹きかえすことを、よみがえる＝黄泉帰ると称したのは、むろんそのためである。

『遠野物語』には、姥棄ての習俗が語られている。昔は六十を越えると、老人たちは村境にある蓮台野という小高い丘のうえへ追いやられた、という。村のはずれの蓮台野は、村落と、現世的な他界としてのダンノハナ（共同墓地）とをかぎる可視的な境界であった。老いが死後の世界＝他界へと、文字通りに陸続きに連なっていた、といってもよい。

わたしたちには死後の世界がない。死はひとつの生命体の終焉をしか意味しない。死者たちがおもむく浄土もなければ、墜ちてゆく地獄もない。生という第一楽章のあとにつづく、死後という名の第二楽章は存在しない。死はたんなる終止符にすぎず、それ以上であることも以下であることもともに禁じられてしまった。ここには、だから黄泉の国も黄泉比良坂もなく、蓮台野もダンノハナもない。此岸（しがん）のかなたにあるのは、同じ貌をしたもうひとつの此岸であって、いかなる意味でも彼岸ではない。のっぺりと、どこまでも陰影なくひろがる均質化された空間が、ただ残される。もはや境界は存在しない。（中略）

境界とはとりあえず、内部／外部を分割する仕切り線である。周縁は漠然と境界のあたりをさす言葉である、と了解してほしい。

あなたとわたしはたぶん、かぎりなく境界の曖昧な時代を生きている。人間やモノや場所がくっきりとした輪郭をもちえない時代、と言いかえてもよい。たとえば、かつて村や町のはずれの辻や峠・橋のたもとには道祖神がたち、こちら／あちらを分かつ標識をなしていた。そこは、村落の内／外をしきる境界、ときには生者たちの世界（現世）／死者たちの世界（他界）をへだてる境界でもあった。しかし、そうした目に見える境界標識は一つひとつ、わたしたちの周囲から消えてゆき、それにつれて、境界のおびる豊かな意味を身体レベルで感受する能力もまた、確実に衰弱していった。

境界が失われるとき、世界はいやおうなしに変容を強いられる。境界的な場所、たとえば辻や橋のたもとは、かつて妖怪や怨霊たちが跳梁する魔性の空間と信じられていたが、境界に対する感受性の衰えとともに、わたしたちはそれら魔性のモノや空間そのものを喪失してしまった。そうして世界はいま、魔性ともカオスや闇とも無縁に、ひたすらのっぺりと明るい均質感に浸されている。

『境界の発生』 赤坂憲雄、講談社学術文庫、序章